

音楽科教育法における実践的指導に関する研究

—— 中学校「創作」授業の分析を中心に ——

秋葉 桃子*

(2023年3月22日受理)

A study on practical instruction in the course of teaching method of music: Focusing on analyzing of "Music Creation" class in junior high schools.

Momoko AKIBA

キーワード: 学習指導要領、中学校音楽科、創作、学習指導案

本研究の目的は、中学校音楽科の「創作」の授業を計画する際の課題を明らかにすることである。研究の方法は、音楽の教員を目指す学生に対する、「創作」の授業に関する質問紙調査と、学習指導案の分析とした。結果として、「創作」への否定的な印象は、「創作」の授業における「課題や条件」と「評価」の不明瞭さに起因していること、「創作」の授業を計画する根底には、「創作」に対する学生自身の抵抗感の軽減があること、「創作」の授業を計画する上で生じる疑問は、生徒の視点に立ち創作を実践することで解決に向かうことを考察し、まとめとした。

はじめに

令和2年度に小学校、翌年に中学校が全面実施された学習指導要領は、既に次期改訂に向けて国立教育政策研究所が小学校の学習指導要領実施状況調査の予備調査が開始されている。前回の平成24年度小学校調査では、「音楽の授業で音楽をつくることは好きですか¹⁾」という問いに52.3%の児童が肯定的な回答をしており、「くり返し、変化などの音楽のしぐみを生かして、旋律やリズムをつくること²⁾」ができたかという問いについても、60.3%が肯定的な回答をしている。また、「音楽づくりの楽しさを感じ取れるように指導していますか³⁾」に対しては、77.4%の教師が肯定的に回答し、「いろいろな音楽表現を生かし、様々な発想をもって即興的に表現する⁴⁾」指導を85%がしていると回答している。一方で、音楽づくりの指導内容について「児童が身に付けやすい⁵⁾」と肯定的に回答した教師は、僅か16.8%であった。また、平成25年度中学校調査では、「言葉や音

*茨城大学教育学部

階などをもとに、表現を工夫して旋律をつくること⁶⁾」ができたかどうかという問いに、49.6%の生徒が肯定的な回答をしており、「音の特徴を生かし、反復や変化などをさせながら音楽をつくること⁷⁾」にも46.8%が肯定的な回答をしている。一方で、「生徒が、即興的に音を出しながら、その音の質感を感じ取り、旋律の創作や音楽の構成を生かした創作に取り組むことができるように指導していますか⁸⁾」という問いに対し、22.2%の教師しか肯定的に回答しておらず、生徒の創作に対する学びの実感と比較して、教師の授業実践に対する評価が半分以下という結果になっている。

平成20年3月告示の学習指導要領は、年間に取り組みされる創作が他の三領域と比べて少ないことをふまえ、創作の重点化が図られた。しかし、「音素材の質感、音楽を構成する原理の働きに気付きながら、楽しみを味わうという音楽の原点ともいえる学習ができる分野⁹⁾」である「創作」に、苦手意識のある生徒は依然として多い。また、音楽を専門としている学生においても、「自身の専門ではない創作は「専門外」であり、遠ざけたいもの¹⁰⁾」として認識されている現状がある。調査結果では、生徒よりも教師の方が、創作の授業に対する肯定感が低かった。これらをふまえて、「創作」の授業を計画する上で、どのような点が課題となるのかを、音楽科教育法を受講する学生の「創作」に対する意識調査と、創作の授業に対する学生の着眼点や学習指導案から考察する。

1 小・中学校現行学習指導要領の内容と分析

1) 中学校学習指導要領の目標と分析

現行学習指導要領は、音楽科で育成を目指す資質・能力が三つの柱で整理され、学年の目標も同じ構造で示されている。以下は『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』より、目標を整理したもので、全学年共通の目標は原文のまま引用し、学年によって異なる部分を、1年生（以下：1）と2、3年生（以下：2・3）として括弧でまとめた。

①「知識及び技能」の習得に関する目標

曲想と音楽の（1「構造」2・3「構造や背景」）などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な歌唱、器楽、創作の技能を身に付けるようにする。

②「思考力、判断力、表現力等」の育成に関する目標

（1「音楽表現」、2・3「曲にふさわしい音楽表現」）を創意工夫することや、（1「音楽を自分なりに」、2・3「音楽を」）評価しながらよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。

③「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関する目標

主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習に取り組み、音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽文化に親しむとともに、音楽によって生活を明るく（1「豊かなものにしていく」、2・3「豊かなものにし、音楽に親しんでいく」）態度を養う。

育成を目指す資質・能力の三つの柱に沿って、学びが質的に高まっていくように示されてい

る。③では、思考力・判断力・表現の基となる感性の働きが「主体的」で、言葉や音楽でコミュニケーションを工夫しながら、自分の思いを伝えたり相互理解を図ったりすることで「協働的」な学びが深まるとある。その前提となるのは、授業が「音楽活動の楽しさを経験」できるものであることだろう。

2) 中学校「創作」の内容と分析

A表現「創作」の内容については、これらの活動を通して身に付けることができるように教師が指導すべき事項について、「ア 思考力・判断力・表現力等」、「イ 知識」、「ウ 技能」の順に示されている。ここでは、前項の目標と順序を合わせて確認する。

①「知識」に関する内容

イ 次の(ア)及び(イ)について、表したいイメージと関わらせて理解すること。

(ア) 1「音のつながり方の特徴」2・3「音階や言葉などの特徴及び音のつながり方の特徴」

(イ)「音素材の特徴及び音の重なり方や反復、変化、対照などの構成上の特徴」

②「技能」に関する内容

ウ 創意工夫を生かした表現で旋律や音楽をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付けること¹¹⁾。

③「思考力・判断力・表現力等」に関する内容

ア 創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、(1「創作表現」、2・3「まとまりのある創作表現」)を創意工夫すること。

「内容の取扱いと指導上の配慮事項(7)」には、「即興的に音を出しながら音のつながり方を試すなど、音を音楽へと構成していく体験を重視すること¹²⁾」とある。小学校の音楽づくりは「音遊び」から始まる。それは、リズムを模倣し言葉を唱え、そのリズムを打ったりする遊びや、言葉の抑揚を短い旋律にして歌う遊び、身の回りの音や自分の体を使って出せる音などから気に入った音を見つけて表現する遊びなどが示されており、音遊びを楽しむ経験が充実することで、中学年以上の即興的な表現も主体的に取り組むことが期待される。また、技能に関する内容にある「課題や条件」の設定については、生徒の実態をふまえ、既習の内容を関連付けて、生徒にとって親しみが持てたり、意欲が高められたりする教材選択と学習方法の工夫が求められている。教師の役割として、創意工夫する面白さを価値づけることは非常に重要だと考える。試しながら創る過程やそれによって創られた創作表現の中には、どのような知識や技能が含まれ、生徒のどのような意図をもって創意工夫がされているかを、まずは教師が解説を通して価値づけしたり、それを生徒同士で伝え合ったりすることで、「知識」、「技能」と「思考力・判断力・表現力等」の内容が関わり合い、創作表現が深まっていく。

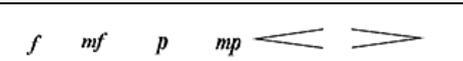
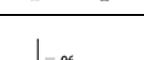
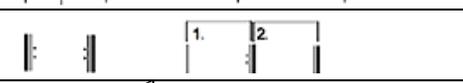
④〔共通事項〕の「知識」に関する資質・能力

イ 音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる用語や記号などについて、音楽における働きと関わらせて理解すること¹³⁾。

「内容の取扱いと指導上の配慮事項(10)」には「生徒の学習状況を考慮して¹⁴⁾」とあり、生徒への指導に際しては、小学校学習指導要領にある用語や記号とその意味について理解できているかを、確認する必要があるだろう。以下に義務教育期間に取り扱われるべき用語や記号の一

覧をまとめる。

表1. 小・中学校で扱われる音楽を形づくっている要素及びそれに関わる用語や記号一覧

	小学校	中学校
音符と休符		
音部記号と五線		
音高の変化 (調)		
強弱や強弱の変化		
拍子		拍 拍子
速度や速度の変化		(間) (序破急) Andante Moderato Allegro rit. a tempo accel.
演奏の仕方		
反復		
その他		間 序破急 フレーズ 音階 調 和音 動機

⑤ [共通事項] の「思考力、判断力、表現力等」に関する資質・能力

ア 音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること¹³⁾。

音楽を形づくっている要素は、小学校では「音楽を特徴付けている要素」と「音楽の仕組み」を合わせたものとして示されている。この分け方で中学校に定められた音楽を形づくっている要

小学校の ◇「音楽を特徴付けている要素」 ◆「音楽の仕組み」 に準じた要素のまとめ	◇音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ (小学校では音の重なりと和音の響きが同義)、強弱、形式など (この他小学校: 拍、音階、調、フレーズ) ◆構成 (反復) 構成 (変化) 構成 (対照) など (小学校では反復、変化、呼びかけとこたえ、音楽の縦と横との関係が同義)
--	--

素をまとめると以下ようになる。

表2. 小学校に併せた中学校の「音楽を形づくっている要素」まとめ

音楽を形づくっている要素に配当学年は示されていないが、必要と考えられる時点でその都度繰り返し指導する必要がある。しかし、発達段階によって同じ要素を「音の重なり」と「テクスチャ」のように違う言葉で扱うため、要素とそれが表す状態については、既習事項だとしても適宜確認することが必要だと考える。また、中学校の用語と記号には「拍子と拍」があるが、これは、既に小学校低学年からリズムと併せて活用されている。児童生徒自身が、表現している音楽の中にどのような要素や用語、記号が含まれているのかを、実感を伴って理解することが大事である。これらの知識を学習するための授業にならないように配慮すべきではあるが、継続的に授業で取り扱い、言葉や記号と意味が一致することで、共通言語として要素や用語、記号が活かされ、音楽のコミュニケーションが成立する。

2 中学校「創作」の学びの系統性

1) 教科書に見る「創作」教材の内容と分析

中学校音楽科の教科書は、教育出版社と教育芸術社から発行されている。令和3年度版の教科書から、表現領域の創作分野の授業について整理すると以下ようになる。尚、題材名（教材名も含む）はそれぞれの教科書から引用した。囲み線は、課題や創作の条件にあたりと筆者が判断したもの、その後、教科書掲載頁、学習指導要領の内容、音楽を形づくっている要素について記した。

表3. 「おんがくのおくりもの」「中学生の音楽」の教材一覧

	教育出版「おんがくのおくりもの」	教育芸術社「中学生の音楽」
1	A. 日本語の抑揚を生かした旋律をつくろう 七五調、「ミソラ」3音、4/4拍子、2小節の旋律 32-33頁 (ア・イ (ア)・ウ) 〔構成・音色・リズム・旋律〕	a. リズムチャレンジ 四分音符音価のリズム、読み「タン・タタ」、4/4拍子、4小節のリズム、反復と変化 16-17頁 (ア・イ (イ)・ウ) 〔リズム・構成〕
	B. 全体の構成を考えながら音楽をつくろう 擬音語・擬態語、テーマは自由、グループ、の詞、言葉のつなげ方、構成と重ね方、繰り返し、始め方終わり方の工夫 34-35頁 (ア・イ (イ)・ウ) 〔構成・音色・リズム・テクスチャ〕	b. 音のつながり方の特徴を生かして旋律をつくろう 4/4拍子、12度音域、4小節の旋律、上行・下行、順次進行、跳躍進行、ハ長調、和音伴奏 21-23頁 (ア・イ (ア)・ウ) 〔リズム・旋律〕
	B'. 全体の構成を理解して表現を楽しもう「くいしんぼうのラップ」36-37頁	c. 構成を工夫して、3つの場面の音楽をつくろう はじめ・中・おわり場面の選択、グループ、音素材を探す、図形楽譜、反復、変化、対照 40-41頁 (ア・イ (イ)・ウ) 〔音色・テクスチャ・強弱・構成〕
2 ・ 3 上	C. リズムパターンをつくろう 8分音符「ツ」4分音符「ター」の組み合わせ、4/4拍子、3種類のリズム、組み合わせ反復、8小節のリズム 26-27頁 (ア・イ (ア)・ウ) 〔構成・リズム・旋律・テクスチャ〕	d. リズムチャレンジ 16分音符を含むリズム、読み「タッカ」、4/4拍子、4小節のリズム、反復と変化 12-13頁 (ア・イ (イ)・ウ) 〔リズム・構成〕

	<p>D. 平調子の特徴を生かして音楽をつくろう</p> <p>平調子「ミファラシド」、4種類のリズム、組み合わせ、4/4拍子、4小節の旋律</p> <p>28-29頁 (ア・イ (イ)・ウ)</p> <p>[構成・音色・リズム・旋律]</p>	<p>e. 言葉の抑揚を生かして旋律をつくろう</p> <p>俳句、4/4拍子、民謡音階「レファソラドレ」、4小節の旋律、最後の音指定</p> <p>36-37頁 (ア・イ (ア)・ウ)</p> <p>[リズム・旋律]</p>
	/	<p>f. 構成を工夫して、言葉によるリズムアンサンブルをつくろう</p> <p>グループ、歌詞「サラダ」、4/4拍子2小節、反復、変化、速度、強弱、重ね方</p> <p>38-39頁 (ア・イ (イ)・ウ)</p> <p>[リズム・テクスチュア・構成]</p>
2 ・ 3 下	<p>E. 言葉を生かして旋律をつくろう</p> <p>16分音符「ツク」、歌詞(ラーメンと具)、言葉の抑揚、4/4拍子2小節、2~3人、重ねる</p> <p>22-23頁 (ア・イ (ア)・ウ)</p> <p>[リズム・旋律・テクスチュア・構成]</p>	<p>g. ハ長調の音階を使ってまとまりのある旋律をつくろう</p> <p>ハ長調、4/4拍子、10度音域、8小節の旋律、まとまり、上行・下行、順次進行、跳躍進行、つながり方、和音伴奏、4ビート・サンバ風</p> <p>30-31頁 (ア・イ (ア)・ウ)</p> <p>[リズム・旋律・構成]</p>
	<p>F. CMソングをつくろう</p> <p>自由(地域名・紹介したい名物)、「ミソラ」</p> <p>3音、4/4拍子4小節、言葉の抑揚、組み合わせ</p> <p>24-25頁 (ア・イ (イ)・ウ)</p> <p>[構成・音色・リズム・旋律]</p>	<p>h. 音の特徴や重なりを感じてリズムアンサンブルをつくろう</p> <p>2人、4/4拍子、8小節の旋律、反復、変化、対照、手拍子・足踏み、重ねる・掛け合い</p> <p>32-33頁 (ア・イ (イ)・ウ)</p> <p>[音色・リズム・速度・テクスチュア・強弱・構成]</p>

2) 教科書に見る「創作」教材の特徴

どちらにも共通しているのが、使われる拍子は4分の4拍子で、偶数小節のまとまりをつくる活動だということである。また、音楽を形づくっている要素は三年間を通して、「リズム」と「構成」が8割に当てはまっている。4拍子に限定されているのは、学年が進むにつれ協働的な学習を深めるために、生徒にとって身近なポップスの曲と、拍子や小節の単位が似ていることで、合奏することへの負担が少なく、限られた授業時間でも創作を工夫するため試行錯誤ができることが予想できる。旋律の創作については、教育出版が音を3~5に限定しているのに対し、教育芸術社は1年次から1オクターブを超える音域を条件としている。リズム創作では、言葉の抑揚と音楽の関連について取り扱われているが、教育芸術社がサラダや俳句などテーマが設定されているのに対し、教育出版は表現したいテーマやCMなど、音楽にしたいテーマを自ら設定する教材が見られた。

教育出版の特徴は、音楽を形づくっている要素が各題材4つずつ設定されており、学年ごとに3

つが共通していることである。題材にはそれぞれ主となる七五調、擬音語・擬態語などの条件が設定されているため、それぞれの創作に新しさを感じながら要素を着実に学び、学年を経るごとに活用できる要素が積み重なる点で学びの系統性が見られる。教育芸術社の特徴は、音楽を形づくっている要素を「リズムと構成」や「リズムと旋律」に絞り、活動を単純にすることで、知識の定着が図られている点、リズム創作の授業を活かして、旋律を創作する授業が2年次まで繰り返されている点で学習の系統性が見られる。繰り返すことで、安心感をもって主体的に学習に取り組むことができるだろう。また、一年次からハ長調や和音の動き、順次進行などの用語や記号について一つの題材で5つ程度取り扱われている。用語は例示されている楽譜に沿って表示されているため、用語の理解が曖昧な生徒でも、まねて創作したり例を演奏したりすることで、実感を伴って理解することができるだろう。

創作の過程では、言語活動を伴って創作活動が工夫されていく。どちらの教科書も、各自創作して完結するのではなく、意見交流をして、得たことを記録し再構成する活動が題材の後半に設けられている。教材を活かして「対話的」で「深い学び」の実現に向けた見通しをもつことが、指導者には求められる。

3 教員養成大学音楽科教育法における授業実践

1) 質問紙調査に見る「創作」活動に対する意識

教員養成大学で音楽科教育法を受講する学生の「創作」活動に対する意識を明らかにするために、質問紙調査を実施した。調査の対象はI大学で音楽科教育法を受講する学生23名である。

① 「創作をすることが好きか」の回答に見る学生の実態

「好き」または「どちらかといえば好き」と答えた学生は48%であった。歌唱や器楽と比べて、創作を「好き」と回答する学生が少なく、音楽科の表現領域「歌唱」「器楽」と比較しても、「どちらかといえば嫌い」「嫌い」と回答する割合が高い。「好き」「どちらかといえば好き」と答えた理由については、これまでに創作の経験があ

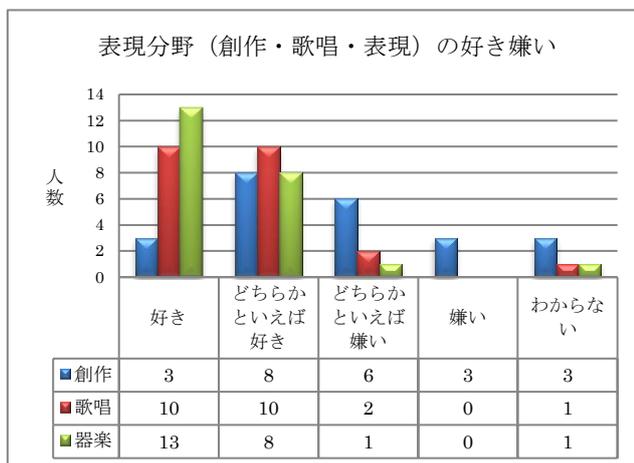


図1. 創作に関する質問紙調査の結果

り「楽しかったから」と答えた学生が6人、その他「ワクワク」や「達成感」、「イメージの解放」といった肯定的な記述が見られた。また、「1から創ることは難しい」「理論的に正しいのかを考えてしまい、うまくいかないこともある」という、経験から感じた課題についてふれている記述も見られた。「どちらかといえば嫌い」「嫌い」と答えた理由については、創作の経験がないことが影響している回答は「やったことがない」「1から自分で考えなければならぬイメージ」の3

件で、反対に創作の経験から苦手意識をもったという意見は6件挙げられた。その内1件は「正解を求められている気がして窮屈に感じた」のように、条件に則って創作した経験についての記述で、5件は「正解がなく、どうすればよいか分からない」「よいリズムやよいメロディが思い浮かばない」「何もないものから創ろうと言われても、何をしていたらよいか分からなくなってしまう」のように、何が正解なのか、良いか悪いかという「評価」が不明瞭だった創作の経験について記述されている。「わからない」と回答した理由は、経験がない、または経験が浅い、「0から1をつくりだすことが苦手」であった。これらの記述から、活用する記号や音階、音楽を形づくっている要素が限定されていることで、肯定的に創作を捉えることができるということが読み取れた。

②「音楽をつくる（創作する）ための技能」の回答に見る学生の実態

学生の回答は「知識」という答えが最も多く、次に「演奏する・歌う技能、楽譜が読めること」、「意欲」と続いた。「技能」を問う質問で「知識」という回答が多かったが、この「知識」には、学習指導要領「A表現（3）創作」の「技能」に関する内容の「ウ 創意工夫を生かした表現で旋律や音楽をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付けること。」に示される、「課題や条件」の意味を理解していることに当たると考えられる。また、「意欲」という回答については、「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関する目標の、「主体的・協働的に（中略）取り組み、音楽活動の楽しさを体験することを通して」に重なることと判断できる。「主体的」学習に取り組む態度は、自らの学習状況を把握し、学習を調整しながら学ぼうとしているという意思的な側面で、知識や技能を獲得するために、なくてはならない要素である。学習指導要領に当てはめると意欲は技能ではなく「学びに向かう力、人間性等」に当たるが、この回答から「意欲は授業を行う上で不可欠だ」「意欲は何を面白いと感じるかということではないか」「音楽の好き嫌いと言欲は比例するのか」「音楽に対する姿勢、音楽をどう捉えているかが意欲」等々、積極的な議論が交わされた。また、現在ヒットしている楽曲の特徴として、音楽理論の知識や楽器の演奏技能の有無に関わらずDTMで創られた曲が、聴衆の心を動かしている点にも着目して、「楽譜が書けなくても曲はつくれるが、それを授業で扱うことの是非」に発展した。

音楽科の「授業」として「創作」の活動を考えた時、学生たちは第一に知識や技能の習得があることで、それを“拠り所”として音楽を創ることを想定していること、そして、知識や技能の習得に結び付く原動力としての意欲と、活動を発展させる理解力や表現力が関連していることを認識していると整理できる。

表4. 質問紙調査の結果に見る「創作」に必要な力

学ぼう・得ようとする力		創作の拠り所となる力		活動を発展させる力	
意欲	5	知識	7	理解力	4
感受性	3	基礎知識・最低限の知識	3	考察する力	1
感性	1	音楽を形づくる要素についての知識	1	表現力(イメージを形にする能力)	5
楽しむこと	1	演奏する(歌う)技能(技術)	5	心の動きを積極的に知覚すること	1
		楽譜が読めること	1	試行錯誤する力	1
		経験	2	(感受性・感性)	(4)

③ 「「創作」の授業を計画する上で一番目に考えること」の回答に見る学生の実態

「レベル」という言葉が含まれた回答が7件あり、生徒の実態や教材の難易度、音楽に関する知識や技能、経験という意味で用いられていた。まず、生徒の実態を把握した上で、授業を組み立てるといふ認識がされていることが読み取れる。また、恥ずかしいと感じさせない配慮、難しいイメージを取り除く授業、面白さをどう伝えられるか、親しみやすい教材かといった、創作に対する抵抗感の排除に関する記述も7件見られた。そして、音楽を形づくっている要素や共通事項、楽器の有無、情景や思いなどイメージするものといった、授業の目標や内容に関する記述が12件見られた。

④ 「最も実践したい思った授業とその理由」の回答に見る学生の実態

中学生の音楽 1	1) 反復と変化を使って、4小節のリズムをつくる
	2) 音の上行・下行、順次・跳躍進行を工夫してハ長調の和音の動きに合う旋律をつくる
	3) 場面に合う音素材を選び、強弱や構成を工夫して、3つの場面の音楽をつくる
中学生の器楽	4) 都節音階/律音階の雰囲気を生かして、音のつながりを工夫して箏で旋律をつくる ※2・3年生では「まとまりのある」旋律となる
中学生の音楽	5) 俳句の言葉の抑揚が伝わるような4小節の旋律を、民謡音階を用いてつくる
2・3上	6) サラダに入れる野菜にリズムをつけて、重ね方、構成（反復・変化）を工夫してサラダを食べる（盛り付ける）音楽をつくる
中学生の音楽	7) 4拍子8小節のリズムアンサンブルを、音の重なり方や構成を工夫して2人でつくり、
2・3下	ボディーパーカッションで表現する
	8) ハ長調の音階を使って、伴奏の和音構成音を中心としたまとまりある8小節の旋律をつくり、4ビート・サンバ風の伴奏に合うリズムを工夫する
『中学校の音楽1』他より 筆者まとめ	

結果は、4)が2人、2)3)5)7)が3人、6)9人で、6)を選択した学生が最も多く、その理由としては、サラダ(野菜)という身近なものを取り入れることで、「生徒が興味をもってくれると思う」、「楽しみながらできるのではないか」「ゲーム感覚で取り組みやすい教材だと思った」という、生徒が創作する活動に興味や関心をもつことを期待した記述が見られた。また、創作が「嫌い」「どちらかといえば嫌い」「わからない」と答えた学生の選択理由は以下のようになった。

2)	a) 和音さえ用意されているのなら、曲のベースは完成しているわけなので、 <u>どんなメロディをつけて</u> も曲として形になるので、中学生も取り組めると感じた b) 「和音の動き合う」を強調しすぎると「これだと変かな、おかしいかな」とプレッシャーに感じてしまうので注意する必要があると思った
3)	c) <u>身近な場面や物語性のあるもの</u> を扱い、場面の雰囲気はもちろん、つながりまで表現できたら面白そうだったから
5)	d) <u>言葉の抑揚がある</u> ことで、音をつけやすいと思った。民謡音階についても知ることができるから

6)	e) 自由度が高いので、進めるにつれて違う方向にいつてしまわないかどうか f) ある程度決まったリズム (野菜の名前) から重ねたりすることでいろいろな音楽を創作できるから
7)	g) ボディーパーカッションは難しくなければ技能でつまずくことがなく、2人組で行うため、一人一人の授業参加率は高くなると考える h) 音の重なり方の工夫をどのように教えたらいいか、またどこまで指導者がリズムを提示してよいかで、つまずきそう i) ボディーパーカッションであれば実践しやすく、生徒の負担にもなりにくいと思ったから j) アンサンブルは友達と一緒に活動ができるため、誰かとつくりだす音楽の楽しさを実感しやすいと思うから 選択理由の記述より筆者 まとめ

a)と b)は、西洋の音楽理論の理解が前提となっている記述である。創作した曲そのものが条件に合っていたら正解、条件に合っていなければ不正解という認識で創作の授業を捉えないように、知覚したことと感受したこととの関りについて、生徒が実感できる授業づくりを検討する必要があるだろう。c) d) f) は、言葉や場面、物語など感受を助ける音以外の素材が提示できるものに着目した記述となっている。g) i) j) は、旋律や楽器の演奏を伴わないことや、1人ではないことに着目した記述となっている。このことから、学生自身が「創作」に対して消極的な印象をもっているからこそ、言葉や物語などの素材や、複数人数での活動など、音以外の要素や活動の設定に着目して授業を選択していることが分かる。

2) 「創作」の指導計画立案時の課題

①生徒の立場に見る教材曲を活用したリズム創作の授業の検討

予備段階として、3～5人に分かれて、「創作」の授業の略案を立てる活動を行った。生徒の実態は中学校3年生半数が創作に苦手意識を持っているという仮定で、教材は石若駿作曲のボディーパーカッション、「The Lick」とした。この曲は4分の4拍子で、2小節のリズムが7パートあり、それを重ねたり組み合わせたりしてアンサンブルをするというものである。それぞれのリズムは4分音符、8分音符、付点8分音符、16分音符を用いて作られ、それに手拍子、腿打ち (R L)、指打ち (R L)、拳を手で打つ、両手をこすり合わせる、足踏み (R L)、胸を手で打つ (R)、の7つの奏法が指定されている。略案を立てる前に、ボディーパーカッションを演奏してもらくと、全てのグループが、リズムに示された奏法を切り離し、初めに手拍子や音読をしてリズムを確認した。奏法を加える段階では、「拳を手で打つ」など文字から表現をくみ取ること、3つ以上の奏法が組み合わせられていること、R Lの指定が利き手利き足とかみ合わないことに、つまずきが見られた。実際に教材曲を演奏してから略案を考えると、活動時間の目安や、注意点や配慮事項、準備物など積極的に意見が出された。また、この教材はYouTube上に模範演奏や解説動画がアップロードされており、その活用の有無や、この教材を生かしてどのように「創作」するか、この授業を年間のどの時期に設定するかといった点についても検討された。

②教科書を参考にした創作授業の検討

学習指導案 (以下: 指導案) は、「中学生の音楽1」の教科書を参考に個人または2人1組で一

題材分作成し、発表を行った。その発表に対して質疑応答を行うことで、各自が実施したいと考えた内容が指導案に記されているかを、客観的に確認することをねらいとした。指導案の書き方や作成には、教科書と併せて指導書研究編を参考にするよう指示した。題材は表3. のc. を基に4件作成された。指導書研究編をふまえて、学生がどのような点に着目して授業を検討したのかを、指導案の「指導と評価の計画」部分を中心に考察する。まず、指導者研究編には以下のように生徒の活動が示されている。

一 時 間 目	A. 教師が創作した「天気の良い昼下がり」「林に降り注ぐ雨」の音楽を聴き、思い浮かべた情景や、思った理由を発表する。 B. 音素材の違いを聴き取ったり、イメージを感じ取ったりする。 C. グループで風景（場面）を設定し、音素材を決める。 D. 強弱や構成を工夫して音楽をつくり、音素材の選択理由、工夫した点をワークシートに書き入れる。
二 時 間 目	E. つくった音楽を発表し、聴き合う。 F. 意見交流を参考に、表したいイメージに近づくように音楽を見直して完成させる。 『中学生の音楽① 指導書研究編』より筆者まとめ

この授業の計画を参考にして学生が作成した、指導案に見られる三つの特徴について述べる。一つ目は、既習曲の活用があげられる。既習の映画音楽を用いて、映像に対する音楽の役割や音の効果について考えたり、既習の標題音楽を用いて音や音楽の特徴とイメージの関係について関連付けたりする活動を、授業の導入に取り入れる。そうすることで、題材同士の繋がりと知覚と感受との関わりについて継続的に学習する点に着目していることが分かる。また、教師自身が創作した音楽を示し、それを聴いて音楽を形づくっている要素を知覚したり、音や音楽から感受したりする活動は、学習の見通しを持たせることを目的として設定されていた。音素材への関心を高めるためには、A.のように「比較」して異なる音素材の組み合わせを例示する案と、1曲の中に分かりやすく変化をつけたものを例示する案が見られた。

二つ目に、指導者独自の課題設定があげられる。C.の風景（場面）の設定については、A.にある2つの情景以外に、もっとイメージのしやすい場면을教師が設定するとしたものや、「四季」から一つを設定するもの、生徒が自由に風景を設定するものが提案された。D.の創作過程では、条件となる主な音楽を形づくっている要素について、様々な設定があった。「音色」と「構成」に要素を限定した計画では、反復、変化、対照を活用することで「構成」の工夫を重視するものと、楽器の奏法を変化させることで「音色」の工夫を重視するものがあった。また、「音色」「強弱」「テクスチャ」を工夫して、一人一人の音に対するイメージを重視するものや、「音色」「強弱」「テクスチャ」「構成」について音を出して試行錯誤する過程を重視するものがあげられた。重視したい内容から、条件が明確化している点と、学生の創作に対する授業のこだわりが見られる点が興味深い。

三つ目に、記録の活用があげられる。指導書ではE.の通り、二時間目に発表をし、聴き合う活動が計画されている。しかし学生の中には、発表という一回きりの本番にかかる心理的負担と演奏面の技能負担を軽減する配慮として、録音を活用するものがあった。工夫点の記入されたワークシートや楽譜と録音された音源を鑑賞し合うことで、「聴き合う」と同等の活動が成り立つ

のではないかという案である。他のグループと音が混ざり合わないよう録音する方法が課題だが、ICTの効果的な活用方法についても、検討していく必要があるだろう。

質疑応答では、音素材と記譜について話し合われた。まず、音素材だが、教科書では木・金属・皮・鍵盤楽器に加えて、「身の周りのものや声」が音素材に含まれており、砂が入ったペットボトルのイラストが添えられている。生徒が情景と音のイメージを関連付ける際、音素材が多くの生徒にとって共通の情景を連想させる音だとすると、同じような作品ができるのではないかという懸念と、仮に同じような音楽ができることが悪いことなのかということや、音にじっくりと向き合う時間が確保できるのか、グループごとに創作する音素材の種類と数の目安はあるのかなど、疑問が多く見られた。記譜については、図形楽譜と表現している音の一致が教師や他の生徒に理解できるのか、拍子や速度の指定がない図形楽譜をどのようにして合奏するのかといった疑問があがった。これらの疑問の多くは生徒の立場で、模擬授業を実施する中で検証されると考えられる。生徒の立場を実際に経験することで、解消へと向かい、それが「創作」の授業に対する抵抗感の軽減にも繋がる。

4 まとめ

本研究では、「創作」の授業を計画する上で生じる課題について、音楽科教育法を受講する学生の「創作」に対する意識調査と、創作の授業に対する学生の着眼点や学習指導案から考察した。その中で、以下の三点をまとめとして挙げる。

1. 「創作」への否定的な印象は、「創作」の授業における「課題や条件」と「評価」の不明瞭さに起因している。
2. 「創作」の授業を計画する根底には、「創作」に対する学生自身の抵抗感の軽減がある。
3. 「創作」の授業を計画する上で生じる疑問は、生徒の視点に立ち創作を実践することで解決に向かう。

まず、回答した学生は、西洋音楽の理論を学び、専攻とする楽器を選択して楽譜を基に演奏をしているため、「課題や条件」が重要視されたと考えられる。創作が嫌いという回答した人数は、歌唱や器楽と比較して5倍であり、経験値も比例している。嫌いという回答した学生が多かったからこそ、質問紙調査や学習指導案には、生徒が「創作」を肯定的に捉えられるような工夫や配慮に関する記述が目立った。「創作」は、言葉や物語などのテーマや人数といった音以外の要素や活動と、音素材や創作する音楽の長さや音域、使用する記号、主となる音楽を形づくっている要素など、設定することが多い。だからこそ、生徒にとって親しみやすい授業になるよう、組み合わせを工夫できる。そのため、略案作成前のボディーパーカッション実践に見るように、指導案の作成や発表の際に生じた疑問は、その指導案通りに生徒の視点で創作することで、解決策が見つかる。今後は、学生の創作経験を増やし、どのような創作の内容が、抵抗感の軽減に繋がるのかについて、ICTの活用も視野に入れて検証したい。

注

- 1)-4) 国立教育政策研究所教育課程研究センター「平成 24 年度・平成 25 年度小学校学習指導要領実施状況調査」(https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido_h24/index.htm, 2022 年 1 月 13 日閲覧)
- 5)-8) 国立教育政策研究所教育課程研究センター「平成 25 年度 中学校学習指導要領実施状況調査」(https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido_h25/index.htm, 2022 年 1 月 13 日閲覧)
- 9) 井上寛士「音と音楽へと構成していく創作指導の工夫—第 1 学年『ひまわりクエスト』の BGM をつくろう—」などの実践を通して—『茨城大学教育学部紀要』第 46 巻(2017), 80.
- 10) 木村充子「プロセスにおける経験と学びに着目し, 創作の意義を問い直す」『音楽教育研究ジャーナル』第 52 号(2019), 28.
- 11) 文部科学省『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説音楽編』(2017), 140-141.
- 12) 文部科学省『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説音楽編』(2017), 114.
- 13) 文部科学省『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説音楽編』(2017), 140-141.
- 14) 文部科学省『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説音楽編』(2017), 117.